

占領期雑誌資料大系

文学編

III

3月 3日
1945年 3月 3日
第3巻

原爆作品と検閲
堀場清子 1
「世界のトヨタ」揺籃期の
企業文化
加藤哲郎 4
地方誌が奏でる。東京行進曲
白土康代 6
岩

原爆作品と検閲

堀場清子

一九四五年八月六日、原子爆弾が広島市上空で炸裂したとき、私は爆心から約九キロの地点にいた。そこで母方の祖父が病院を経営しており、私たち一家は縁故疎開をしていた。被爆直後から、村の小学校が収容所となるまでの三日間、三百人の重傷者が倒れ伏し、事実上の収容所だった病院での酸鼻の極みは、本稿の主題から外れるので省略する。ただ一九八一年秋、メリーランド大学でブランゲ文庫を見る機会を得たとき、原爆作品がいかに検閲されたか、を追求することは私にとっての必然だった。

当時は文庫資料の整理をされた奥泉栄三郎氏がおられ、万事のお世話になった。事前検閲で「全文発禁」の処分を受けた、美川きよ「あの日のこと」の存在を知ったのも、氏の書かれた文章からだったように記憶する。文庫はいつも人手不

足で、コピーをもらうのに時間がかかった。この資料も翌年の三月ころニューヨークのアパートへ送っていた。急いで開封し、息をのんだ。六ページのゲラのすべてに、力をこめた鉛筆のバツ印が走り、枠で囲い、上端に「[SUPPRESS]」と書き込まれていた。被爆の状況を具体的に描いた部分には、多くの傍線が引かれ、竹矢来越ししに直面するような気分がした。

第一中学校の三年生だった一人息子の夏雄が、爆心地で被爆し、勤労動員先の航空機工場まで逃げのびて、七日未明に息をひきとる。遺体を尋ねあて、工場裏の芋畑で油をかけて焼いた。その悲劇の一部始終を、夏雄の母の「私」から「母上様」に報告する書簡形式の、哀切きわまりない一篇だった。一九四六年の夏にCCDがこの作品を抹殺したのであれば、今年も蘇生の夏にしようと、読み終わったとき私は決意していた。その四月、「あの日のこと」の検閲資料を握りしめて掃国した。朝日新聞社の編集者たちの尽力によって、それは「朝日ジャーナル」一九八二年八月六日号の巻頭を飾ったのだった。

「世界のトヨタ」揺籃期の 企業文化

加藤哲郎

二〇〇九年四月に七八歳で亡くなった上坂冬子は、晩年は保守派の論客として知られた。しかし彼女のノンフィクション作家としてのデビュー作は、一九五九年に第一回思想の科学新人賞を受賞した「職場の群像」という労働ルポルタージュだった(一九八一年に中公文庫に収められた)。

その「職場」とは、彼女が高校卒業後に勤めたトヨタ自動車工業株式会社。そこでは一九五〇年四月・六月に従業員六〇〇〇人中一六〇〇人を解雇する会社側の人員整理案に反対する労働争議が起り、深刻な労使関係にあった。朝鮮戦争から高度経済成長への過程で、日本の経営の一つの典型とされるトヨタ労使協調体制が構築されるが、「職場の群像」は、争議後五〇年六月から五五年までの職場の変容を内部の女子職員の間で追い、後に「自動車絶望工場」から「世界のトヨタ」となる大企業の歴史的ルーツを活き活きと描く。

上坂の描いた「職場」の原型は、ブランゲ文庫の「トヨタ文化」という雑誌から知ることができる。今や世界一の販売台数を誇る自動車会社トヨタの、一九四七・四九年期の社内誌である。五〇年争議前夜の牧歌的雰囲気伝わってくる。

ブランゲ文庫の「占領期新聞・雑誌情報データベース」で「トヨタ」と入れると、一四七三件が出てくる。新聞の業界報道や広告が多い。労働組合のニュースも含まれているが、圧倒的に多いのが、ここに紹介する「トヨタ文化」掲載記事一四六件である。検閲処分箇所は一件と索引で出てくるが、自身をじっくり見ると実際は二箇所ようだ。

「Prange control No.7778 Toyota Bunka」は、トヨタ自動車工業株式会社編で、出版地愛知県挙母町とある。現在の愛知県豊田市は、トヨタの隆盛で市になった企業城下町で、もともと田園地帯の田舎町だった。「トヨタ文化」誌上でも上坂の「職場の群像」でも「田舎」という表現が出てくる。

ブランゲ文庫に収録されているのは、創刊一号(一九四七年九月)から七号(一九四九年四月)までで、六号が欠号とされているが、愛知学泉大学上田裕教授が地元元の図書館をあたって六号をみつけてくれた。

創刊号(一九四七年九月五日)二二頁の巻頭無署名論文「文化を働く者の手で」は、「文化国家の文化は日々の生活の中にある、能率的仕事・簡素な生活・働く者の芸術が下からの文化」と宣言する。その見開きに藤本俊「協力は如何に能率と利益をもたらすか」があって、会社の作った「社誌」としての性格もうかがえる。童話、随想、囲碁、コント、百人一首、時局語教室「レクリエーション」などが入っている。

哲学青年らしい研究所の伊藤三千雄「思想遍歴」が面白い。西田幾多郎・桑木巖翼・和辻哲郎・田辺元などの読書を経て、

文科に進学した弟が共産党「シンバの汚名」で検挙されたためマルクス・エンゲルス・レーニンも一応読んで記憶に止め、河合栄治郎の英国流自由主義に共鳴、国家主義者の右翼攻勢、観念的「科学技術新体制」に反発して三枝博音の科学史から史観を得、「進歩的な政治勢力の結集とこれに対する人民大衆の支援と進歩的な科学者、技術者の協力で、一刻も早く強力な真の民主政権の樹立を」と訴える。実名でのこんな文章が、トヨタの社内誌に載っていた時代があった。

創刊号で一つ、エビール・ルイス作、入江敏光訳「散文詩・ピリチスの歌抄」が検閲処分にあっている。検閲官の目からすれば、この政治色のない叙情詩も、著作権の關係で翻訳許可を得ているかどうかが問題だったようだ。検閲処分はもう一つ、最終七号「文芸特集号」(一九四九年四月一〇日)の社内募集随筆入選作、大塚隆之「カーテンの向こうから」である。ここでの「カーテン」は「鉄のカーテン」で、ソ連抑留体験記であることが処分対象になった。

二号(一九四七年二月二五日)の巻頭言は、発行人山中清一名で「社会主義・物質主義に対抗する文化主義・精神主義の清流の復活」を説く。巻末KS「生活科学の必要」では「家庭の合理化・科学化・節約」が謳われ、どうやら戦時の「非常時国民生活様式」とはやや異なるが、占領下の庶民も「生活の知恵」を必要とされたらしい。

三号(一九四八年三月二五日)には「文化部紹介のページ」があり、トヨタ工場内の文芸部、芸能部、絵画部、弁論部、

生活科学部、邦楽部、洋楽部、茶華道部の活動が紹介されている。「その所属は、会社にも、組合にも、属さない自主的な団体であり、その運営は、会社、組合の共同運営となっており、全て民生委員会によって決定せられるものであります。従って、戦時中の産報的な傾向も無く又組合運動の政治的行動の一部でもない、あくまでも我々文化国家の働く文化人の集いでありませう」という。今日の労使協調の原型とも、当時の「文化国家」における一般的企業文化とも読める。

こんな「トヨタ文化」の全文は、五号(一九四八年七月二五日)に「第一回世論調査」結果として発表されている。ちょうど三月に芦田内閣ができたが六月に昭和電工疑獄が発覚、七月に政令二〇一号で公務員スト権が取り上げられ、一月に東京裁判判決が出される頃である。

当時のトヨタの全従業員六二二〇人対象の大規模調査で、四〇四六人が回答し、全一項目への回答分布が職員・工員別、男女別、年齢別でデータ化されている。

問1「天皇制」支持七九%、不支持八%、どちらでもない一三%。問2「政党支持」は社会(片山哲)四四%、民自(吉田茂)二八%、共産(徳田球一)七%、民主(芦田均)二%、国民協同(三木武夫)一%、支持政党無一八%で、政治学者にとっては貴重な記録である。

問4「ダンス」やりたい一九%、やりたくない四〇%、どちらでも四一%。問5「女子の煙草」よい一一%、悪い五〇%、どちらでも三九%。問6「結婚のかたち」見合三四%、

恋愛五七%、親ませ九%といったデータが、当時の職場の雰囲気伝えてすこぶ面白い。

問9「愛読新聞」中日一八四五、東海毎日四九四、朝日三七七、中京三六六、毎日二四九、アカハタ九六、「愛読雑誌」リーダーズダイジェスト二二三、恋愛小説一〇四、講談雑誌七九、新潮六六、映画雑誌六四、婦人生活五三、キング三八、探偵雑誌三六。問10「趣味」読書八四〇、スポーツ六五三、映画四九二、野球四九一、音楽三七九といった実数データからは、「戦後民主主義」のローカルな実相を窺みとることができる。

問11「職場で一番不愉快なこと」では、賃金不足一五五、責任者・幹部の封建的性格・態度九七、職場の非民主的雰囲気九一、融和心・団結心の欠如八六、民主主義のはき違え八二が主な回答である。同時掲載「世論調査批判会」では、社内各部署の二一名が実名で登場し、以上の調査結果を討論している。実はこれこそ、五〇年争議にいたる当時のトヨタ自動車労使関係のデモクラシーのあり様と矛盾を率直に表現した貴重な記録である。

プランゲ文庫には、占領期の地域文化サークルの同人誌・回覧誌、民間企業の社誌・社内報、労働組合支部機関紙・共産党細胞新聞まで入っている。戦後「文化国家」と「民主主義」の内実を物語る資料と証言が溢れている。

(かとう・てつろう 一橋大学大学院教授・政治学)

地方誌が奏でる、東京行進曲

白土康代

万一そんなことがあるとしてだが、私が自伝を書くとしたら、あたかもそのことが特別な運命であるかのように「私は占領期に生まれた」と書き出すかもしれない。そういう人間は団塊と呼ばれるほど大勢いるというのに。さらに「私は進駐軍基地の町に生まれた」とでも書くことになるのだろうか。生まれ育ってきた時間と空間をとらえ直す時間とするのは私が還暦をすぎたからだろう。とらえ直すべき時間と空間、私の場合は占領期であり大分県別府市である。基地は一年間、私が小学四年生のときまでそこにあった。ガムをかみながら町を歩く米兵を見かけたし、パンパンと呼ばれる女性たちが夕方ともなれば家のそばの公園に立っていたのを記憶もしている。

確かに占領期の地方都市の中で別府だけが、特別の運命を生きた町というわけではない。しかしプランゲ文庫と出会ってからは、別府は故郷という以上の特別の町となり、町を歩くとき、うっすらと残っている子供の頃のさまざまな情景とともに、町全体が立体的にその光と影とともに立ち上がってくるようになった。さらにその情景は、六十数年前の不鮮明な活字を追うとき、作品の一つ一つに、より濃くなった光と影